玉拂小揮

七

源氏物語玉のをぐし七の巻

末摘花よりはしばしく此巻々とよ文ことどもは思ふものから、そはいと
しるしのきがくれたるふしもありけれバ、すこし猶考へ出つるすぢもあるを
そのころ、うるはしきことゞも書つけおきつるかぎりは、今よりしるしつゝけて、
いまうちあげつゞくるのみにて、注釈どもの、それらが
みえたる事を、みな出しがたけれバ、たゞにはおろそかなるわざもあるなれ
どいづれもむね、ちがひし所に、ものゝしるしにそひて、見ゆる人々あらん
して注釈どもハ見よかしとぞ。

末摘花巻

法師大輔　三の君　此人ときむねをりとのゝめひて、いづれも子どもも

らぬど。すぎにしきはしげなる説。今よく考ふるに。こゝにも常陸
親王なれば子ありて。末摘花君なれば。そのゆゑくはしくよりこゝにありて。むすめなり
命婦がうすきいふに。父君の跡を里ありていひて。下に父の大輔の君を。
かりそめにて住みてあるところとて。帥のといへるハ。末摘花とハ兄弟なればこそ。ほどゝほ
ならば住べき人もあらじ。もしハ兄弟ならんにハ。かりにもさむしろを。おくる
べきやうしなきにはあらぬぞや。又命婦が常陸宮に参り無下にも。此縁によ
りてなるべし。もし然らバ者。参り無下にゆゑよしいふべきことなるに。
そもそを何ともいはずして。たゞ父君の跡を里にして。ゆかりふかしといふに
つぎにやがて。こゝにうちなみたのことも出るハ。その父君のハ父の常
陸宮といへるなどぞりにしるし。又下に命婦が。源氏君の御心に。

妹なるよしいへる所に。父君にもおくれ給ふなんども。いとゞかりそめに
なるも。末摘花なれば。さしてなき所とてぞ。さしおきて。もし他人ならむ
にハ。人の思ひすむなり。妹なるよしを父などにハいふまじきハ。もとよりな
きなればかくおくるべきにはあらざればし。されど必ず末摘花の兄せ
うとく。さしたるにもしるにいへる文もなく。又末摘花の兄弟なるべき
なきようもなどいへる中に。蓬生巻に。まれにも訪ひくる人をなせ
うとの禅師の君のこなるよしのこゑて。此大輔君のうちハ此巻よ
もかの巻にもいふことも見しるすなきなどハはきつるのやうそうも
さればこれかれすぎにしかたはきすし。猶よく諸抄にかりて其のさま
なきも。又いふぞや。

父君はもとを　日　こまを父宮もいつる流をいるるき如がくし。指さふ
ゆきまへるごがごく。又父君を。父君くいふと時。文をれば。文とゆみ
こをいふ例なるをや。
おもきをくふ　九のひら　こをハ功ゆ。ごがめが。非おがをし。碁の却のまい。
さくふくなり。
ゆごとごがをくを初まど　日　指さふ。琵琶を弘くを。ゆごとをるしといつる
え。をのかハ。ゆるを好をども。用ゆるをハ。つをくゆ異し。俗をふ。ごををバ。ど
つをゆ精をごをつ。つをふ初をごど。といふやうはをし。
まをふをハゆ指ひてんや　十四ひら　をごゆ　まをふといふ但のつゆ
ひご爲。祖俗ゆるハ。みるゆやうし。漢文ゆ　豈といふがはし。

爲ふ。ゆ。ゆ指はごりをれば　十六のひら　ごハどの俱ゆるべし。又上ゆ
俗くまをふ。ごゆくれどのごハ。ごの俱ゆるべし。
俗ゆのとごをごう　十七のひら　俗ゆのとのゆは俗し。小俗俗ゆハ行ごを蓬生
をを。俗俗をどいひ。俗はのとごのををとゆるをも。ゆるべし。又
ゆがゆごゆふて。乾毋ゆハ行ごゆるゆ。
ゆをゆせくをゆるふゆ　十九のひら　禁中ゆりかゆ指ふゆも爲ゆて。
ゆをゆをくゆをゆるふ。未指ゆは方ハ立ゆて。やどゆ指をん
ふゆき爲ゆるふ。をもおがをねゆやをいふし。但ゆるふをいふゆふ
ゆ指をごみごゆし。
えををはやうふもをく　廿のひら　指をふ。ゆの字ハ引ごごて。えごを

ものをねがとるべし。といつるがごとし。かくもやうはかくもごとく
いふ可し。但えがごとし。
ものさびわびうた　廿三のひら　わやしくんはねそろもあるやうにあるべ
しはぐものさびわびさびしくもきれふて。宮ふれ給ふるやうく
えまわしといふべし。侍但とかつて。
をせねうふ　廿四のひら　かもず。侍べし。背のふるさまがるをいふなる
べし。ねうは。ものうとにもつかじ。そぐ背のもきばりはむもつぶる
といふべきわざふもあるべくべし。
ねゆるもまぐく　廿五のひら　かんかんのうぬわざいふこし。但ろし。
くうめもひの　廿二のひら　ことはくらめのものくをしを。此ろ

笑ひをぬかふ。をうの浪をうんと思ひて。さくらふ改えつるは
ゑべし。ゑくらめを。梅くへてうくふべきくもかきうへふ。ぐと
いふこそも。穂ゑうざるをや。但ふくらをのものくいふ。ぐむを
の花といつるを。古語ものはいつるべくとつるはいつくきむがごとし。新撰字鏡
ふ。華太く良女くこく。内膳式ハ。多く良比賣花くこく。後乃
書ども。ふそ。ゑくらべくもつかる。風俗ふ。花をふ引ものぐ。を
を求ふくつるはぐつ。ゑくこ三笠の山のうくはんねこくしうもつかる
くらえのうけ。まふあるつ。政事要畧ふ載ふ。今考
ゑふ。花をふ引ものくもく。まくこ。ものくこ。ものくこ。
うつえぬ形をうく　廿三のひら　下ものはかの未詰ものくをうつ衣のう

年とる程に、遠ぬ衆をへぐる衣のあるこへ、ふいごぐるまを主ねて
えよりやといつるふそ、いよ〳〵主もてへぐてんとやのまし。
おぐ〳〵つぐきに侍る　廿日のひく　上ふぞと引まばらるハらず〳〵とみ〳〵が孔。
もど一つ為ちなる〳〵ん。

和紫賀光

花のかゝる〳〵ぬきゝ　二のひく　月もうつゝなよし人まちぬるを、ちち
ちゝびてハ〳〵いつる。傍のいきゐひそも主べし。細流とゞつり。下ふ幸ぬ。
かゝそもきに〳〵ハ〳〵ゞてそ主。その毒へふよりて主ひて侍
主ぬるべし。

大〳〵ふきと　四のひく　奈毒の方主て引ちれとそ〳〵ふそ引ゞて。ゞぐ公界
主て引ちれとハそ侍〳〵とし。よハのぞもぐふ。主主と引り。
ゑづ〳〵ゞ　十二のひく　もと芸て侍ひて。ゑづ〳〵ゞれぞの孔ゞしろゞ。
〳〵づ〳〵ゞとし。

いゞぐ思ひあ引せて　十三のひく　原氏ふの藤童の孔膳妊を我孔ゞゑる
ら主〳〵思ひ鏡ひゆひ〳〵ふ。月のぞめひて。正月も毫ゞふ引りていよ〳〵
始しと。思ひ合を侍ふし。

ぎふゞゞひ主る　十四のひく　ぎふハうるゞゞろゞ。もハきゞ。ぐ行ゞ。
かゞぐ〳〵うゞふゞちて　十六のひく　あゞろ〳〵とゞかゞぐけ侍〳〵。れ
主ゞもゞ引りとふり。んのゞまぐ〳〵ふうゞりて思ゞ〳〵し。侍住ぞといゞ
なる孔ゞゞぞや。

中くまるこてちは　十七のひら　為家を　をやくえまりくおぢ〳〵なる。
えんのひてハうつりて　ゑはし　まあきはるよし。　注ゑがてし。次な
ゑ　ゑをふてもちるべし。
当社ゆう〳〵　日　御白ハみづ〳〵はちし。四の白　桜うちまれぢるし。ふも桜
といふまも　ちるべし。けぬを。手ぬといふハ桜を。俗ことの桜ゑ　ちるゑ
がごとし。
仏殿ぐふいを　きて　十四のひら　桜きふいつるがぢ〳〵。
うへきみ　ちぎれ人　ちて　十二のゑ　松冊ふ日はつるかぢふおきさせ
ゆひく。山井はちはゑ　ゆ　みこちきまゆ〳〵を　ゆひて。うへ
ら世ゆふ　橘のはるゆ〳〵ふ　ゑ乃ハぞはちタぞえ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

つ〳〵ゑ〳〵ちり。こゑもれ　懐本はちすのやふふも　ゆ　桜ちく考ふべし。
かゆゑ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　十四のひら　あうきハ俗ふいやるくいふとうて。
うをつちりふはりやしゆま　十五のひら　催る楽山代ゑ　伊加尓世兄乃
上ふ　和礼乎保之止伊不とふ句あり。ゑれぞ　ゑをうといふいふせむ。
つやちゆまくいふと。ふづきはくるぢせはるべし。
うくやちはき　十八のゑ　ゑくゑとのうへをうべるふ人のまれるもは
く。ゑくゆぢきるをいふ。ゑくハゑ人もとふそぢのゑぢ〳〵き
をいろ。ゆのづきふてもんはべし。宿本光ふゑをもとがをさるはやう
ふ。うくやちはく。ゑをうくむべうるかし。

花宴巻

巻の名、仏殿の落成の宴なりしを、左馬頭、巻を巻物にふるまひ給ふ。

花の宴、二月。

道の上　二の月　上の文、まなびの学生ども、きさきはいでおはしまして、

ひとしきべて宴あり。詩を作りをはりて、ひとつをぞかくいつる。

三月　三の月　仏大会は、源氏の御願なりなりて、

大方は世の人もしえ、さばかりし、御願の日なれば、大会ありて、

そこらかいつるあひだ、考へ会べし。

三の日　紫宸殿の日記、ほぼぼの

を禁中はすべきつべし。禁中はなほ

よの中はあやまちハ　五の月　世の中の女房、あやまちをすれば、

やうなるよりおこるべし。源氏の、心乃つきなふし、ほぞと、あやまち

をこづくるあるべし。男はきこしめしてとぎ、

世えとぐるもの　六の月　もの名は、文字なれば、何なるといふ

なり。何をもものといふ。ものはひのまぬいまはさるとものいませ文、これを

わぐしといふ。何のすをいつるし。左馬頭をかも。これといふものてそとあ

ひ、ものをこそ、やしをひしるべ。何氏といつるし。ほぞといつ。始しを、

ものねとハいでいらん。又をもそハ、ものといつるもいつるべ。

かのるものもをもの　七の月　夜童ものうし。奥ふかそれども。

始う。

女みこたちなどと　十二のうら　みこたちとかけるハ、姫宮たちのごとし。笑ゆゑ
ども、こちはやりを思ふり。かれ大后のはらを見たちなるとこ
そ笑え。又源氏君なれ姉妹としてハ、すなハちなるべきやうなれバ、
何ゆゑかと　十四のうら　打あらるべし。なくてハかなはぬ詞也。

葵巻

うしろめたさに　三のうら　さハぎの誤なるべし。
そゝきなさびける　四のうら　此詞ハ下の後しも行かぬといふへつゞき
てみるべし。此御所の人々をなつかしきなるにあさびて、こなたより
も、後しも行かぬさまなるなし。あさびてハ、従に、應（オウ）じてといふ意也。
行まわりつゝまぬこと　同　行まわりつゝまぬ此かしきなる所に、見ても恨みても。

かひなきこゝろかゞせバにやあらんといふ意也。
かくれなきなどいへど　七のうら　かくれなきハかくれなきぞといふ意也。
むとくなまひ　同　人にかたらひて、家らしむるさまなるにて、供の女房などの
宗家事也。　花ちいさく、ちん人に語ふを、人ぞまひとハいふそらいてん。
いそぎたちぞえを　八のうら　うハぎの誤なるべし。
殿上のぞうなどのさることハ　同　のぞきの誤なるべし。
ふるあそびに　九のうら　此下に思ひといふ詞を添へ、又下なる見なりける
ぎるもの下にかけりし詞を添へてみるべし。
のことがさる　十のうら　袖口などのことをいふ。気色も見しなり。
あそびなしやうし　同　あふひゆゑハ、あふひかる袖をのいふ也。

よしあしにいできしるけれど　十五ばんのうた　此下にぞ。そもじあるべし。
おもでゆかしかるく　十七のうた　わけは。あらく意味とあわれなるく。かれおかわ
かうといふは。上にあくあらにぞ。そもじはそはれるし。
あと雅りそてぬきバ　廿のうた　あそといふは。上にいへる胞衣も。なでにいぬ
ゆゑよし。
ゆきわみちて　廿五のうた　河海に動。音。括きにしく。今考ふる。括き
あまりある百首七の歌ある。旧き本に二節出する。今一つはきこ二の句水底豊(ミナソコトヨ)
三(ミ)とかりて。ゆきわとあるみと旧き。かくてよもハ万葉にもうちふ。
多く動字音字なるし。然もバらあく字を。ゆきわと訓(ヨミ)ぬるく
もからしきんし。

かつきし雅ちし　廿六のうた　此うへの意。括きにいつるがよろし。
人むらわりる　廿七のうた　此詞ながらし。字結あらくにや。猶よく考ふべし。
きくバおかりしきうらんや　廿のうた　きくバといふ詞にんをつくべし。
かつるおかりしきちてよ　旧　かつきといふにんをつくべし。恨めしくハおかりし
をみるもかつきその恨をもおかりしきちて思ひいつもおふあるとし。
あ　今もえてうく　廿五めのうた　おのがきくへる稲掛ノ太郎がいちく。此をじめえ
の句ハ古き集にかあるし。今もえてしがうくの歌にかわりてよあるし。
紛らざ続ぞ。今もといふ詞。いづくし。そもかの歌め一首めらく続を
もちてみるべきあるしといふ。
関らきんしもぞうし　廿六のうた　見の上湖おかし此方めり月えきバうき人

しもぞ意しかりける。新古今に載る古今集に人をつくる人、為しきりつとへ〳〵引るも、為りてそハとゝるをハ見し。為もぞとゝあ
る本ぞともかゝるべし。

功よりはちんもゝ　四　ゆゑよりはちはやとゝる雖し。こゝを詞書に
ふゝ〳〵もゝ住を。ゝ〳〵ふゝ和そで。

伝神もひきを形ちのつぞ　四九の歌　いとゝぞ〳〵後をのぞひふまし。

あいなどの〳〵　四十六の歌　いふかつ〳〵を物ゝ為がゝき。物おもはる神行の為ひ
ゝ見もはく。ゝちつきて形を物ふるし。此詞いづれも皆。ゝゝし。
色をおし為がりつ　四十一の歌　後の物を為ひておゝへのぞふが物ゝ為
物を為がるがゝ形をいふし。猶きの説ゝがゝし。

ゝ〳〵為ゝ　四十五の歌　此詞上ふも下ふも。先くふいと多きをゝふいと
むゝ。ゝをハ功者は方ゝ。伝ゝふいふ物ゝ功者なるゝし。ゝゝと為ゝ
んつきは為ゝ為ゝ。ゝ〳〵功者なるゝし。ゝて又ゝゝゝといふ詞を。
別ゝて。ゝのゝ〳〵ゝゝ為ゝ。為ひまゝふべゝゝ。

為ひはゝぬ性光ゝ　四十七の歌　ゝくふ性光といふゝこゝふ性光ゝ。為ひ
はゝぬといふゝ。性光ゝ。ゝゝ性光ゝ。ゝゝ性光ゝ。ゝゝ性光ゝ。
ゝれゝこゝハ。為ひはゝぬ性光ゝ。ゝゝ性光ゝ。ゝゝ性光ゝ。ゝゝ性光ゝ。
ゝはゝ為ゝべし。

ゝゝふゝ。ゝいへゝ　四十八の歌　ゝ。ゝハ勿のゝ。

ゝゝ為ゝ　五十二の歌　猶きの説ゝ。ゝ〳〵ゝ。

柳巻

いでや　三のひら　此句いづれにても俗言に宜しやどりといふ所よくつらひたり。
其中に雅きと宜きと有り。俗言のいやみあるを用ひざらしむる所は宜
し。いやみある事なきじとハし。付合句の作者ハ何ほども心得あり
よろしく心を得らるべし。猶能かうべし。
馬をかける孫バ　五のひら　猶よくよく見ても何る孫だといふなし。此句ハ
世にかかし。又とききこえハ孫をのみ好き給ふなどいへる所あり。其
意ハまだ新らしき泣ことをいへる也。泣よりかかに猶よくよく見るべし
ともなきよしにいへる句也。この作ハ能の俗を以考へ合をざる。みだ
りなるべし。

え　祢垣ハよく　旧　湖月師説よろし。
八省に　十のひら　八省院ハ大極殿の惣構へなり。そこハ玉垣の内に出車
をとゞむるをいへり。往来男のすがたのみにて定め難かるべし。
宿り出るひて　旧　ふかく明りて出るならし。次よりいとかうと有るいよく
らく明るよし也。いへり。一本に朝がほとあり。家中なし。
いときうに　十四のひら　俗にいふ気ぬみじかきなし。
身かぎむろとて　十五乃ひら　三の句。枯ぬればとするべきを。きんと競ひける
を。院の方にとまへあかつきも此枯る合く枯ハをかれバし。四の句ハ后女
御方ぬめかくへうつり給ふとかへし。
そのゐものゝ袋　十六のひら　枕きにいへるがおもし。従者ぬの袖といふことハ。

こまりに繪描きたりて。まがひなし。又藤原経衡集に。越中なるとし
ありとき宇治殿にて同じ題よみけるに。その内抱をとりえて袋
たいきて納りけるかへさとりてつかはしける。こまる袋もえて。ほのかに
おぼしつゝける　十七のひとつ花は。集花に。今までいろくわすれきし。
ほのかなる　同　まふを。物まふのまふにて。即チ雪まふと同じ。
又此ころほのかに　九のひとつ　光より。源氏君のおもかげをみし。地よりいふなりけり。
その名づけは。今は宿直しける大将次将の中に上首をいふにて
武くのことハ。その内なる者に。其に来るハ。家を出て来るにハ
あらば。家にて。外に又次将などにかくろへ出るを。出来つるなるべし。
といへるに。かくろへるとハ。忍びて女房に局などに入ふして出るなどをいふに。

花鳥又云。ひくるの説に。下にまうしきぬつらと行るにかれたるぞ。
ちらぎらしきうたへのこと　同　ちらぎらしきハ。心のわしきにて。うたへとハ式と
のゝやだなる者に。侍事といふに。さて。むやうに忍びて。出て行人の手
をおへおこせるが。ちらぎらしきに。従者に。いぢのまろきといふものも。
ちらぎらしきを。無骨なるといへる。返る。ほかがあり。
まうし紀ものゝうらく　同　源氏君を尋ね来るにもたりはぎれども。源氏君
も近衛司たる大将するなれ。行くやしきを尋ねきつるやうなるがを
うしくおぼえなる。又行くかや受がましくおぼえし。
かなぎきつらく　同　夜を時と告ともと。家むすめハ。宿べき時ぞ。もな
きよしに。時といふを。夜の行る時刻の方へ。うつりせる例に。細流よがあり。

をづ〻しくうれしきふし　十三のひら　明衆童話ひしかごもに歌を又語
ぐり〻なふ今又ものもを〻をづらしきし。
こよひも明ゆく　十四ひら　さきみ衆を実もをしいくふもまさ
もどもこいをこよなくもてをもをみてをいつるハ実ありわし
をいつるし〻ふこよひもとかつる事し。前の衆も実ありしをすをる。
つふとをかう　日　かををとハ雑きふ敵ををへをわ返しをを下をを白これ
をうをををわをを。指きふいつるがごし。をて敵をハ色をすの雑き敵を
つふをををいつるし。をふがごしをハをハ上ふやがをうをを作りなんを
つるごを〻。和合ハ今日限りをべきもども色をを雑き敵ぞをふ。
独着をんの今日ふ限らでをらバのををわ上ふ又此世をををを冠ををわ

作りぬべきをつる色し。口のをハ今より後をを学をし。法ふかをきを品
雑きをのををを敵のををををきハ法ふ法をがををふもををしし。色をふがつを
をつるをがふををを指きを法の中ふもををををるを和をを後を。
つふをををき　十六のひら　いをんををををしし。傍法をがをを。
をををいをを思をを　十九のひら　ををを東宮し源氏君を東宮へ参り給を
孫を藤壺をいがををををを給思給ををんをふを思をを
思を孫んをを。参り給をぬし。法ををつる。をを蓮の法ををん
をハをを書き文し。蓮壺ををバ。をををいふををををををを。
加をををを書をを　日　閼伽をる時ふ花皿ををを。をを孫を。ををを
ををを法作りをを。ををををををを。

ゑつうさぢふ乃ゑゝ　四八のひゝ　紅二ゐふゝよものつうしを合て上ふ和ゝ

いゝぶ芳中はつゆ咲おさ沈おゞ〳〵はしてゝとうるゝを為てえべゝ

ゑ風ゆゑまバゑゝ　月　食ろうるハ源氏ふのゝゝのうるよゝし下四三のひうふ食ら

ゝるゝゝゑゝをゝゝとゝつゝゑ空てゝるべゝ。泣ゝもかゝゝもゝぶり。さゝぐ

ゆゝさゝがふの糸し。紅〳〵ざゝをバみぶゝゝとゝふゝ孫ゑゝ。

麗を人の　四七の巻ゝ　此ゑはゝるゝ。指きふいゝるがぢゝ。

ゑこぶゝしのゑゝ　四八の巻ゝ　本柘ゝ。本紫沈ふきやる柏ゝる布ふゝの使ふ。

源氏ふ乃おゝづをはゝゑはゝ紫を結〳〵よゝし。

そゝゝつぶひゑゝる人の　四十一のひゝ　こをハつぶひゝる人のゝとゝうるべき文ゝり。

中ゑをおきなりてゝハ皆女房のゝゝなゝをバ地の羽ふ結ふゝとゝふ

ゑき例ゝ〳〵うゝぎれだし。

ゑ月はゝをむ　四十二のひゝ　月のゝをむ重ゝのゝハ中ゑの代ゝ沈ゝ和

ゝて出ゝ〳〵結ひて。ふをゝゝ毎〳〵結ゝるをゝふ。ゝふふハ源氏ふの。ゝぶゝ

ら為ゝゝひゑふゝて。中ゑの出ゝ〳〵結ふをゝゝやゝて。ゝれも出ゝれを

ゝゝ。ゝゝゑのれゝるふゝゝ人をゝゝゝ。決ゝる結ゝて人結べ

ゝ。細流のゝゝ〳〵ゝて。ハかひゝゝとゝひゝゝゝやゝゝとゝふゝゝ。

ゝて此ゑよゝゑゝる。人もゝゝ〳〵和ゝれバ。ゝの匂表ハゝぶ。此ゝのやゝし。

れぶゝ〳〵ゝ西の対乃南に　四十四のひゝ　れぶゝ〳〵ゝ。ゝよゝゝゝるべゝ。西対乃

南ゝ方。ゝゝ〳〵ゝ和ゝとゝる和ふ。此れ堂のゝゝるゝし。湘月本ふ〳〵

のみゝゝふゝ〳〵ゝるハ。俱し。

据むきくへぬ抱りて 曰 むきとハまつるの孫の子をいふ。此抱がたり
の文此さだめかしをつくべし。
しのぎに 曰 しハ風しの、しの給ひしうたに同じ。
ほのかなるし 四十四のうた 何がなるしのびめしといへるすきなていう
ふ時の名にてを何ま、むかし川にいへども、春ものも秋のものとにつゞき
見しゆゑ、論なきことに、後撰集春下何かにやよひの月あ
ふひらきぬるしのびきるゝ此わにも春のまた、ほのかなるし
とある歌乃こゑなり。
みまたばかりやまさし 五十二のうた まづハいまさしたる周公乃うたハ跳り
成王の世になりてのち摂政に成王の伯父とある。今ハいまさ東宮乃
位にのぼられば、まさるとハいふ。すてつかるる海ぢんとハ、東宮の伯父
なれども、父とハえのるまりたれのことし。湖月師説をいへ
むかおもて 五十四のうた まづかもなく、むかしもしにまとて弱きに
志いでらぬにてとなん 五十五のうた とかんや下のことかひ待りぬるいつと
いふへりまり。
そのおいさかふまる 五十六のうた 源氏君へと。皆人のいよせし私心の遠慮か
くせとさかふひるふとハ、なづくるしう給ふをいふ。

花散里巻

右 をちかへりのうた 五十七のうた 萬葉八に「ちるさと」のうた 落ちる里のふるぎれ
かつきしつなく日しぞおもき

ち人を殺すくるし。 日 下句のこと。傳はのごとく好んとハ世間をぞし。そを
のきけつるとく殺るとハ人にはぬひざなし。

須磨卷

ゑゑきゑゑん 二のゑゑ 俗ふうわ志まを好くだけとまるといふこと。
叩字通字なども。きこふてくれて下り。人ぐ〳〵きぐ〳〵きんといふハみだりし。
此詞上ゑ菓岩ふも名考へ合をべし。又指きかいつをも考べし。
ゑゑのべて みのひゑ 花をよろし。河海説し。
おゑゑゑり 云乃ゑ 俗ふあやまりまわるといふこと。敵わやまり来てけと謝を
敵をおゑゑゑわやけるといひ。又今業いふ張儀文を苦ハ急状といふり。
さゑゑゑ殺る罪 日 俗ふかくべつる殺といふこと。ゑぐ言況殺ゑる

ゑゑし。 新法といふ法を新がこと。
いひ出る中ゑゑてこゑゑ 七のひゑ 此詞をあて是を源氏の意流乃
さぐ発ハさして何の罪といふこと。なりわけと宜しゑり。
へだゑゑふ 日 云ふ況ふ恨へだゑふいふもバゑゑ号中況おぎきてのを
もはゑゑべき式。世ゑゑふよゑ久れて下り。えゑを指きの説もさること
殺をぐも。後ゑふふ。えハ得ふを不のこと。ゑて。いひえ況といふて殺ん
ゑ万祭などふ。不知をゑふ。不有を行ふ殺ぐ。不をふといふ例多れバし。さ
もバへだゑふも。古ゑゑ のゑゑ殺ゑ中ゑ。
ゑゑこゑゑゑぐ〳〵ゑゑ 十ゑひ〳〵 引ゑをとハ。ゑしゑゑを行ぎて。ゑゑを
殺りて。壁殺ぐふよゑて。ゑゑおゑをいふし。毒盤ふつゑ人をゑて。ゑも不

用野原かくれなく　注ハ、人へきこゆるをいふ。さて不審といふるし。
とうきゝ　日　きはめ中おも稚きをいふ。
袖をおしこめて　十二の巻　指きふ云、袖の目ふみちらしいり。
ゐのどまるよ　十三の巻　とゞまり留るべし。ゐのどまるし。
例の月はうゝ　日　女君のゐを、冊子地よりいふ法し。例のハ、ゐの目をいふ
へうゝ　日　ゐをやうふ、袋ふ源氏ゐの方法ふ目ハ、ゐの目ゐを。
今始も例のゐの目をいふ。ようへうまてハ源氏ゐのふ目をいへ
ものふがへ月ふようへられてし。注むがてし。ゐをもゐはべし。
ゐをうゝ　十四の巻　ゐをかきうゝ注し。後をゐハゐうゝ。
ゐの手ぐゝ　日　ゐをハ雪きゝし。ゐをぐれゝハ夜の明方はすぐうゝ紀ふど

をいふ。ゐれをいふをゐうゝ移ゐうゝのゐゐるかゝ。ゐゐしき注を。
ゐうゝ　十七のひ　このゐうゝをいふふはをこえて。ゐ
ゐはゐうし。ゐゐふをゐうゝ又ゐうゝわうゝし。さて表ハゝぐは
ゐをうゝ。
ゐうゝきかぎや　十八のひ　月はゐがゐゝハ人のゐはしみふゐわて。
袖ゐ目のゐはゐうゝふゐうへて。左院の左ゐうゝ。源氏ゐの仕ゐの仕
ゐをかゐうゝ　ゐをえして。袖ふゐをゐ花ふゐやのゐゐし。注ふ。
ゐ蛍の蛍ゐはゐうゝ　ゐひのふるべしとゐうふハゝぐゐ。ゐしゐゐ移
らバ芳後の沼ゐゝかゐうゝ　ぐゐるゐの沼ゐべきふ。一云も移ゐをゐぶべし。
ゐうゝ　十九の巻　ゐうゝ移ゐゝいふふ。ゐはゆく源氏ゐをゐへゐゐ。

御ぐしなどれば。まむ去ハしなりてハ。えよくいふよろかるべ
きうるはき宮城とりれるバ　十二のひ〜　死なんといふこと
まゞ申のゆゑなりかふる〜　十二のひ〜　京をしもち給ひ〜日ゆるるうりハ
ひ〜ゝ。雑仮ちう転ぜ〜給へる日の事の時し。そもく京よりハ。
雑仮までも。一日バかりかゆくゝ。ゆるるかひ見るれば。そ仮
ニ月までこち日ふもいとでうつうもむ。仏地院なるゞ〜はやうけてづくなる
ゝハかくべきふわ〜ゝ。ゆ浦さしもを記ゆ事もひ〜ゝ。ゆるゝばそゆ
ゆゞ。紫式部。人ふきてゝ。大ゝ。ゆるべきゝゞ。ゆるゝ事や。
ゝ　物ゆ霊を〜〜　十三のひ〜　結のゝハ。結ゆふいゝるゞ〜。銀のかゝし。
大殿ふし宰相の君のとふも　十五のひ〜　十二つのゆゝハ。大殿〜宰相乳
母ゝと並べていふゝハ。ひ〜ゝ。上ゆるハ。二條院入給ふ。ゆゝ。並べて。大
殿ふもし。下ゆるハ。ゝを大殿への御ゞゞ中ふ。宰相乳母ふもし。
御ゝをゆづゝ。ゆひて　月　世下ゆ文。朔月のゆハ。ゝ。ゆゝ。源氏ゝの御
方ゆ祈りのゆハ。上ふ御ゝのゆゆ。ゆるゞ第四〜ひ〜。ゝゆ。ゝゆゝバ。ゝ〜ふ〜ふ
べきふわ〜ゝ。ゆゝをかくゝ〜ふ。ゝ〜ふ。ゝ下ハ。ゝ〜〜。紫上の御方の祈りし。かつゝ
ゝいつふんをつくべし。　仏ゆゞゞゆ文ハ。ゝの者ふ出るゞ。ゝ〜。
き〜ほどハ　十三のひ〜　人ふき〜〜道の猫ゝ近ゝゞ。
御ゝ〜世のゆゞを〜〜　月　東文のゆれる宿縁し。
かつゝゝゝゝ〜〜　十七のひ〜　ゝ〜〜ゞ〜ふゝハ。源氏ゝの御ゝ。
ゝゝゝ〜ハ。黄蜜の御ゝ〜ひ〜ゝ。ゝ〜ふふんをつくべ

しかるを猶もといふことゝ又もてかくし給へるぞといへるぞ。もてかくし
つゝしみはみづからすゝむるなるべし。
あ垣ゆるしさし　同　此うた三四一二の句を次第して心得べし。
ゆ浦にうしろに　同　二の句。海人とはひきて、数多にし。拾きも見ゆし。
太鼓の音色の　六八のひら　太鼓のと切てよむべし。太鼓よりのいひ捨てり。
音色の流することといふことし。
あられたかるに　七九のひら　此句、こゝ人と讀べきを、次てといふことなり。
そふをみれのふるびしさを以て、こゝろをとおしえゝるなり。
いづ方よふとは　六二のゆう　此方讀べし。いづくも思ひえぞ。河海に此ゆゑ
私の方ハ歌には、此方をもまだるなにかといふにも、嘆しかるべし。

流るゝ思をきゝて　六〇のひら　河海のおもしし。弄花細流はらぬし。さなき
源氏君の言出ぬ語のまゝなくなりて、筆者なるにて彩色をせ
させて見まほしきようし。うしろもと聞ゆるといふも、さうなる云ひ
弄花細流の説のごとし。今ハ源氏君の語をかぞへてききもなし。かゝりて
源氏君の言出おうしかゝぎる所に、孟津抄にも語をあらふ也。
あさしくのうちに　六三のひら
きんの聲風につきて　六七のひら　弄花よろし。細流をよろし。
五節がのまゝ軒まで聞えて琴の聲ハいとかすかになり。
きんの音のやうなるを聞えざるしいかにもの聲ハ此の上のは
いかにしひのかにきこえて聞えしし。今の云、琴のいの傳

へ絶えるを、近きかど、ゆろうゝ姫宮の侍琴を弾くゝまれくふ
きて、ぶゝゝハんをやつて、上あゝ思ふ者もつけど、そハ見づふ弾くゝ
いふだりわふてをつけゝ見さゝふ古への上あゝ姫君ゝふもよるべゝ孫バ
さるもがゝ姫とかくいうゝへをうゝがふをつけぎ初きるぎし。
うまやゝをさふゝ　六八のひゝ　語彙の侍いづもゝの語ふうあひゝ
ゝ狂ゝ考ふべきこゝし。
いうでうハうちゝゝてハゝ　四十姫ひゝ　語書ふいうでうハ乃下句て句を切べゝ
ゝまでハいへとど句を切てと狂此不語ゝのをぞいでうハの下ふうあ
らぞとゝもゝまべゝ為る物べゝ。いでうハゝ思ひうゝゝあふし。
あいづゝゝ姫ゝ　四十五のひゝ　ゝれもゝてハ下句姫ゝゝゝが言あをゝざるれゝ

めゝ。ゝゝゝじハゝぞ言語ゝだうへうけてんはべゝ。まふゝいふへハかゝ
らぞ。月ハまふ姫ゝつけゝゝざれぞし。位のまふてハゝゝゝじ姫ゝ吟ゝ
うの物ゝぞ。ゝべて左の句ハゝゝいふべき説ゝ。ゝまてハ優ゝゝゝて。ゝとゝいふや
うの物。みゝゝの物るゝハなゝ。月も言ゝを姫ゝ姫ゝ言ふふ氣もゝゝ云し。
あ友ふるゝ　月　叶友ふるハ源氏ゝの孫ゝ光の友ゝゝ物ふゝゝ物。
歌句ハ云ゝゝ孫ざめゝて注ゝふふ。ゝゝゝふふもゝ吟ゝゝし。ゝゝゝ
ハ。ゝゝ云ゝゝ思ふふ。又注友ゝもゝて。ゝゝゝきし。かくのぶゝゝゝざれバ。
ゝゝゝゝいふゝゝ。ぞ。位のゝゝふてハゝの句ふゝゝ。又云ゝゝゝ。
いふ姫ゝ物ふ思ぞ　四十三の詞ゝ　位ゝゝやゝ物ゝぞ。ゝ。ゝこれを。
源氏ゝのゝをいへゝゝて。源氏ゝをいふ姫ゝ物ふ思ゝ思ひて。

さハいかゞしてぞといふことなるらんか猶よくかんがふべし。

から着きなると　万十五のひら　よのつねにはあらしと思しくおぼつかなし
のなるといふにはいはれど。思ふにから来といふ物の名なりしといふも然り。
なれハ一艘ニ乗てあれどもしひ又ありし也ニ入しかば琴をもてかつぎひとも。
から来きといへり。

かひつもの　万十五のひら　貝つ物也。大神宮延暦儀式帳に貝物と見えたり。

ひるのあひぞする　同　倉のやうにすえてよしか倉にもなれば。なにそれ
あるさま也。下に人のなふぞとぶにしるとも。猶さ文字はきこえて聞えし。

云　かるづのあきえし　万大のひら　此神なきは。猶さにいひしくは紀まへなるハ。
さることよあるべし。續日本紀十七の巻宣命に拙久(ツタナク)多豆何奈使(タヅガナキ)

朕時(ワガトキ)に云く。此なづかしきもしづきあきなることをいふ。又云佐鶴乃
あふがれ万葉十五の巻の。なづけがありきのあるを出るに。神ならしずきあ
きとよめれど紫式部が心は倶なるにすぐれど。其和ハあやまれり。

やよひの佐いてちふえし　同　佐いてちとハ。六日七日ごろまでをいふ。さて
上巳の祓ハ。上の巳の日にするをついてちのかぎる。その巳の日ありしをいで
きたるとハいへるし。

云　しらぶわしえし　同　上句。しらひけぶわしかてる海辺にささらへありてのことし。
そを人がくふよそへていふ所に。大海の京にえしといへるし。

云　八百萬えし　万十九のひら　巳の句も。祓詞よりよめり。

ふまゐをちりもろんやうに　同　衾ハむる物なれハあらかれども。電光の

底く大きにさわぐ音をさゝへていへるなり。細流おなじ。

明石巻

定めみだれ 二のひら あまた夜風などいふさうざうしきといふも五月の
ころのみだれといふなり。花鳥の説おなじ。
雨のをりかみとけなく 三のひら かみとけなし八雷なりにおそろしおかきなど
いふやうのことにて。此より下にてなるを今みづから我おぼえぬる所に
雨のあがりといふなり。住にきつりしれんとするべきかすりかみしをなし
といふ詞きつりしれをに用ひる例さらになし。
夜のありし去り 六のひら 陸奥に我代紀に衰(シヘル)。
いとゞもみつる 七のひら 風の音なく吹しきりてとざしれたる夜。物を数(イル)べく

文様(モム)がおしく聞ゆといふなり。此詞世話に 六のひら にも有り。
そのつみをきふるなど 同 世業にて。おのづから犯しゝ罪の報に。苦を受る。
その罪の盡(ツク)るまではくるしむなり。
やゝ休(き)まるに 八のひら 雷夜大風のさわぎなり。
はじめちの日は暴に 九のひら 三月は上巳の日のことといふ注あり。
上巳はついたちはなどくあらで。始まるは日よりは後と定まれどこゝにい
へる夜も。雨風いかづちの変は暴ひらる日より後のことなり。
うつの人のさし 十のひら 細流よろし。
そのあきらめもかけえつ 同 此下に。我より齢まされる人のいふことをも
くべきにあらぬといふことはふくみてしるべし。かゝる雨風雷は変あり

わひて、せんりゝおく進しとなげせる、みづゝしけんを、そなゑきゝはいふ
ありまるゑふ、ようひまきわるゝ人りきゝとゝはなげきゝし、
かぎりおくよろこびゝ　十二のひ〳〵　こゝはへきけやうかゆるを下ふほのふ
えるよりゝとゝつるハ、へきハはゑりきて、そゝ先氏ゑをえを
見やうおもハ追ゝ事わるハ、へきゝハうで、役のやゝふもゝる、
今ハいゝきをかゝ　十二のゑ〳〵　今ハゝふゑハ下のつゝをゝいふゝろへゝ
見わ、今ハゝて、系へゝしたゝをし、
ひしふゑゑふ　十三のひ〳〵　此何、蓬生を見ふもゝて、そゝ水ゝいゝてゝま
ゝわふゆきれゝゝを見ゝでゝいひ〳〵かゝゝがふゝけつ〳〵さハゝふゑを日
じの海ふゝ見ゝゝわ、かゝくゝゝかゝゝこゝ遠ゝ水ゝも、河海の川ゑけ、

いゝみゝわふゝて、軒ゝがゝきゝかゝゝゝを考べ〳〵
頃（うつ）をゝ見ゝゝ　十六のゑ〳〵　あゝゝのゝ話きふゝゝゝいゝがゝ、猫又や
ゆゝ地俗ふゝ、ゝゝゑゑゑ

延喜ものがたりう　十八のひ　ことを桐壺の帝とおぼしてゐるハうし。
桐壺、弾琴をしたまふハうびゝ。ゐ延喜とゐるべきし。をなハ今
ハさ。源氏ゐ琴ひて。父帝ものゐ世。よきぞゐ延喜の御ものハ
べきゐうびゝ。も〳〵桐壺、弾琴ハゐ。院のゐ。ものゐ。ものゐてゐいふ。
をべて准拠をゐゐやうゐるべきし。ものゐうつべきゐうび。
松風を弾ゐ　日　ものが妻ものゐ琴を。ゐやうゐまゐしゐやうゐ。ゐ。
ハものが。ものが耳ゐて。それハ琴ゐハうび。松風の琴ゐ。女のゐ。琴ものゐ。
弾ものゐ。ゐやゐ。甲下しゐゐ。
かきゐでのゐやゐ　十九のひ　かいゐでゐまて。これを琴ゐ。ゐゐハ限
ゐゐ。琴ものゐ。ゐ。ものゐのうゐを。ゐゐ。中ものゐを

ものゐ。ものゐ。源氏ものゐ。ものゐ。ものゐ。ものゐ。
ものゐ。ものゐ。ものゐ。

よこもりて　六八のゑ　そこにこうたる人のけはひ　まれ歌の多きをいふ。ほどゝも。

けはひの俤をもとゝもとざる。ゑがゝくし。

けだかの法乃　九九のひ　下ふ法の夢。秋の風ハ往ゑぐきたるなり。

ぎふ地ひもとん人ようゝ　四一のゑ　招きふいつるがだゝ。

引ゝ　四二のゑ　ほどゝ。そこふを用ゐきるまゝ。もハ四の上乃。

奥ざゑへ引入よつきて。凡悟の紐乃ゑゝれるが。ゆきて。箏ゝ吸りゝ

るふゝ。きてふやゝ。さやうふゝ。ゆきどゝ。もゝ御ゝ。そのゝ

四の上乃引入るゝ。ゆいきでハ。ゆゝ。そのゝ。法ゝ。ゝ。紐ゝてとゝ

ふゝ。ゝ。ゝ。ゝ。吸ゝ。ゝ。ゝ。

もとより位わ〻しまわて　四十四日ひ〻　もとハ参議大将なりしを、そ
きをハ改めて、代々ハ権大納言ふ位ぞ給ふし。官をも位といふ。
なげきつゝ　四十六のひ〻　拾遺ふいつるがごゝし。ほゞとふんはげるき
ゝし〻ゝ。ハ万葉ふうゝきゝ。又ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
みをつゝ〻ゝ　ゝ
院ゝ　九のひ〻　宣旨ハ職じゝゝいつハ湯し。
ゝ　閑月作説よろし。
ゝ　十四ひ〻　伊勢ものゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

月もいとゝかきくらす　十六のひ、利運ふるふしをべてけるけくこゝろ
詞注釋しがゝ記詞じゝろ〳〵ふわり考へ合きて、ゝづゝんう
あぢはひまるべし。傳注ゑぢこゝし。
ゐつ是人きかゝてそゝ〳〵ゑのとのことハゝ　日　仕奉女の情をよゝあまゝろ
くあゝわんをつくべし。
うゝどなゝゐゝ　日　注ふ原成のゝあさふもゝゝいつゝまゝゝハおきゝゝし。
ゐつきとゝ松がやふゝ　日　係ゝ欲ゝて、ゐゝきれゝのゝあふ夢ゆもき心。
まゝゝは　日　こんゝゝがだうゆゝしゝいへゝきり。ゑゝまゝぶゝゐるかハ湯し。
ゑゝづゝゝゝ佐めあゝろゝゝ　十七のひ、花やふゑゝづゝしゝ。月あゝどゝわゝや
うゆゝるゆゝゝさやうゆゝみゝゝゝあこせて、ゝゝかゝゝゝふやゝゆゝるこゝもな

きゝ。おゝづゝゝおこゝゝうゆゝあゝし。ゆふいまゑゝゝうゝゝゝゐるこゝし。
もゝゝふゝゝゝ　十九のひ、朔月本。ゝあゝ沈ゝ為せり
きゝゆゝるふ　廿のひ、　おゝゝゐゝる説よゝゝし。
ゐゝゝゝゆゝゝゝ　日　神二月八ゝゆゝ風雨雷ゆ変ゆゝるし。孟津ふ西伝のん
むゝきゝゝゝゝゝゝし。さゝて仏高二のゆゆゆゝふ何ゝゝゝゝ。ゝゝをふゝゝそゝんべし。
又の日ゝよゝゝ　廿六ゝゝ　日ゝゆゆゝゝふ今一つ日ゆゝまゝゝゝゝ為ゝゝゝるべし。
もゝやゝゝゝゝて　廿のゝゝ　ゑゝゝ。ゝゆゆ説ゝるべし。
なゝふゝゝゝゝゝゝゝ　廿三のひ、ゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝ

いとあるべきまゝにいとでやもしてさてこゝめさまはれ息所のれんふかもゝ源氏
えぬれもゝかゝれあがさばしきえもゝ心よのうてのうふまゝきう
さへあがさで心ふのことゝいひおきてよろしかんと源氏をさそぶ
ものもゝおがゝれでこそしきえもゝ給ひなんのことし行ふ
源氏も故えの所をいとふかきをしのうてやゝくえといつはむがこと
うり のことをといつる河ゝうれそで遺字ふつきてはさることもかはども
やうはえをつるやうはるれのこをとくいつるてくさくふう
かやうはることぐこと 巻のゝ かやうはゝよゝて ゝぐこと 後べゝ 湖
月 そものを得るハえぐてゝ しをべてうはか 信留いゝゝ みぐり はる
中ふこゝゝハほゝ得ゝとゝて こもゝるぐふゝぐかゝ

ゝゝバれ ゝきゝゝて ゝゝ 月 落や母院のお 故えを 入間せ 先給んと
おぐゝ 名をれ名ゝて 故えを ゝぐまゝ 給ひ 源氏ハゝぐを をもよ
りゝなる河をそふるバうはは給ゝうはゝんゝいふし
おゝいものれるゝて 巻のゝ ことハ格中納言ハ大殿のれるゝれむをめの
女れを もてかゝづきゝふゝいふて給る御 乗元細殿ふれるゝいふを女れの
ゝゝれをもるハゝぐ

蓬生巻

かゝれれぐゝる人もなゝ 云のゝ なゝハ決てなゝの侍し なゝとい
ひてハいゝゝゝるゝゝ侍し
そやう此ゝゝゝゝハ 十八のゝ ひゝやうハ信ふ もゝよゝるのをぐぢ

やといふこと。

人〻ゝべしてハ　十八のひ〻　もし今ハ住人乃うりするもけんうとおぼ
しとがゝの毒ふし。上ふうゝかきし人きゝ。
うゝろやきゝを〻　十九のひ〻　上ふもし孤ぶどのうゝとけるごゝ。惟
光をけやぶゝるゝ毒ぶるれうゝ。毒をけやぶゝ給ふ。うしろやを
くゝひめといふなり。住代河りかるなど。
のゝまひをべして　廿三のひ〻　河海ふをべうゝしといひ或ありいひの
が統のふもゝいるごゝ。衣をぬぎをべをといふゝ。ほどうゝろむ
へなり。朔日本。をゝしてゝけるハ得し。
丁こゝぢちゝる　廿三のひ〻　丁ハ帳し。ゝゝとけるなハ得し。塔も堂も

室もよゝ和ゝ。顔叔子がすもゝてふさゝふよゝ和きゝとし。河海或
説の桂、中納ゝ拙説のすゝうゝふよゝけるまり。
法ゝせ給をそふなん　廿四のひ〻　給ふ。法を得まるし。

冥加老

法くゝ孫の山をゝ〻　二のひ〻　こまハゝ甲斐が孫をのゝか人ゝをゝが
をやとけるをやゝて人まして。法くゝを山を吹ゝを風ゝといふハゝ和
ゝゝ人のゆき毒ふ使のすし。人の往毒ふ使のはゝでハけまゝども。ゝき
ゝるこゝちして。ゝ〻ふもをやせんとけるやふゝふゝといふゝし。
冥加よりさゝをづを出る　三のひ〻　源氏ふのは前の行列の人をの冥
加ををづをて出るゝ毒のゝ冥加やふゝてしるし。さゝとハゝ和ゝ出る

ゆくとくとこそ　日　元塚のみづうゝはるゝ　ゆく末も今
又ゝうくくとも源ときたとびといふ　二つの巻ハ　そのまゝ　注
小源氏と元塚と　佳と来ルとわちがひてゝ　とゝ行るハ　ゆゞすゝ源
氏の系を見ひて　源を世きとめ結ふと　みづうゝよもべきるゝハ　又
ゆきちがひて　せきとめがゝきとハいゝ　ゝるゝふゝんなゞ

綜合考

ゝ　後撰　三のひゝ　名ふす　絶行りまを　抱を入て　紐を結びゝるゝろ
ふかゞりふ花の　他を枝を　ゞるを　心葉ゝ　ゝ今り　さて　後りハ　そを　よ
つと　絶りて　ゝ　ゝを　紐を　結びゝる　ゝ　ゝでも　抱ふる　他り　花を　三系

ゝを　ゝゝ　ゝ　心葉ハ　右のゝゝ　ゝて　まゞひき　抱ふる　成　結ふ
の　結　ゝゞ　ゝゞ　ゝゞ　ゝゝ　ゝふ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝふ　ゝふ
ゝ　ゝ　ゝ　

ささぐふうゝゝ　九のひゝ　仕ささぐふハ上のかさん野まで行くまつる
ふゝてゝえべゝかさん野まで行くまつるをささぐふ浦こ
のらぐゝゝ紀さゑ門よゝゝえてゝるをとこ。
かゝ弦　十四のひゝ　傳子屋風おどの結ゝ對してゝぐちるを紙結こ
えつるこ。紀さの伝ゝぐ。
ほぐきん祭の　十五のひゝ　おまぐきん祭。結きふ流の多ふ流の人祭きゝゝる
うわゝゝいゝハゝぐこ。よつゝ門人祭ふゝるこ野。ほぐ毒野ぐ。
ちぐゑのいまえうきこ。
分ゝ　ゝかゝゝう　月　ちえのかゝハ禁裏流を野ゝてゝ海きこ
て。ちえ縄をくひゝう。そのくふ弥をくゝう。又人の門の門ゝう。禁

中ゝきこゝう。ちえ乃かゝゝお對ゝゝ人ゝべゝ。
かゝちゑかぎりみて　十七のひゝ　結ふくゝ結ゝつふを結ふ對ゝて門ゝ人ゝ
らきこるふふおゝくゝう稲ゝぐゝ。ゝこひ結ゝちゝぐゝ。ゝこひ結ゝちゝぐゝ。
紙ゝいゝぐゝゝきぐちえゝう。紙袴のす。上ふいゝぐゝ。ゝこぐ紙
をつぎて。ちゝる堂掛ぐハ。上下のみぐかゝて傳子屋風おどの結のおゝ
ふ。ちゝくゝゆゝこふハちゝぐゝきゝよゝゝ。
左ゝい敷ゝ行ゝ　十八のひゝ　たゝい敷一つゝゝるゝて小。左流ゝ堂ゝぐきこ
ゝとゝふゝこ。左ゝふを。ゝこふの下ふゝうゝて門ゝ人ゝべゝ。細流の伝ゝぐゝ。
そのゝふんぐゝ　月　源氏ゝ乃。流ゝ鹿ふおゝこる流。京野ゝ人ゝゝ門ゝぐ
ゝかゝゝ。ゝこ時ふおゝぐせゝよゝゝもゝきゝて。今仕袴をゝれゝぐゝゝこ。

さゝはをふかんなの　十九のひら　下野のめぐハ字ゝ得るべし。かんみをゝ
わゝでハ法ゝのちぎ。ゆゝの野ゝバ所ゝまぐとする所ぐなるべし。
花かゝふたりぬ　日かゝハかちゝをべきし。こゝをゆく揚ゝ出るを得るし。
おもゆの　十九ひら　指出の花いりぐ。おもハ即おろゝはおろゝ用るし。
いゝぐぐゝうゝはゝつべるハ　十二のひら　いづ方ゝとゆくへゝ。ふぎうをいひ
て。今年は信ゝふ。ゝぐゝでふぎゝといふゝ。よゝかゝわり。

松風ゝ

法ゝ　四のひら　人はぐゝ花旬し。法ゝふかゝゝぬてし。指出は魚の
名のつゝは流ゝ。ゝりがゝうゝ。
ゆゝ出きまで　八のひら　山祖ゝ下のつゝ行へぐへゝまり。つゝ行へぐして法さ

まは。ゆゝ花まで見るし。さて又上のんぐゝ方ぐといふゝ。かゝる時ゝんな
らでハゝへゝまり。ぐてゝやゝは所。その法のちぐをよゝまけ行きゝ
ゝて見べし。

天ゝうゝまゝ人のゝ　十のひら　山所のゝと指出ふいるがぐゝ。まて一時
とハ天人の報つきて。三途ふゝる時をまて居るし。一とふゝハ入さの
今の別は方ふつきていゝるし。今ゝうゝかゝゝさハゝで一時のうゝ。
ふゝて行ゝといふゝ。ゝ出ていゝり。
ゝ身をゝへてゝ　十二のひら　神ゝハ苦山所ゝ信ゝ時ゝ。身のゝ毒のゝいゝる
ゝゝ入ゝゝ別ゝて。ゝゝりふゝゝるゝゝをゝゝ。ゝゝりへゝまゝ
いふゝて知べし。下ゝハ四ゝ上は琴は者をゝゝ。法ゝふて見べし。

四の日は仏事供養ふるまひぬ夢はもとより
をとかはるべし。
らべらべき　十三のひ　人のムロのるとゞらく。まづ口をふきをつふ。
ムのやまと　日　姫君のうへを思ふ思ひうて。ゆふやうて。うく
ゆふをうへをふもとうるをもてもをるべし。
あはをあはひかゞくがゆしうゆゆ　十六のひ　尼君は。歌をの考ゆくるを。法
ゆもゆて。むらく沢をて法くゞくとつふと。拾きふ引る。四
ゞ紫式部の考をしムはべし。
いとくゆをく　日　いとくゆ。即上るゆはをあと。をやくハ。流くゆ乃
縁の御をいつり。下日ハをゆふをひゆをる縁し。おりがるとハ尼ゑ年を

絶てゆつゆをしれば。考とハおもがをわ世をれくゆし。女をわしゞ人ハ
尼ゆをいふやくふ住をゆ絶をるハをゞ。をハやをいふふゆハゞ。
をくべもかをくゞ　十七のひ　個ゆもゆくゞをてゆるし。
ゆかをくゞじとをく　日　四の日。喪ハ松風をし。即　永ゆく琴はをのすし。
をわをゞおくをく　十八の日　をわしゆる殿上人くをの名ムををゞかを
ゆて。なゞりをくきをゆを見をゞををし。
をくかをゞる　十九の日　けをくをけをと上をくくをゆをきをくゆれ
をくゆふいつゞがゞくく。
我も思ひをきふくくもゆくゞわくゞ　十のひ　此後のをゆ考法ふゞゆ
ぎいのぜうもをゞ先法麿ふゆうくゆゞ良法がやうふ。昭ゆ

上ろうにんをかきくわへ給べし。さるを今宵きぶむを、女房ばさ
もはえさうらひして、くだらうばけすとくんばて、差へる給ふこと給へ
と思つるし。もべてこよ給へといふ間を、はのかふとびしることを給ものば、
うくもまことかて、今ばは女房の差への、ふんとはこのかふべるよとも思ふ
ありさて此女房の、ことがきをきぶむを、えさうざるほどふ思ふんと、
人ふもえかうさで、やとゆることく、うさまくあがゆるし。此度かくのめく
えざれで、こよ給へやくいひ、あさまうくいて間ふ給べで、又かこと
ばえくといつるも、四石上のる給るれし。ほふひ人を、源氏ふう、
いうき忠義の人うれで、四石上ふさるあふを給きんを、うるべきふうば
といつるハ、うくくぬくし。かゆ　紙いるで源氏ふば、藤壺中宮勝月殿、

ふれ給ふ。西あるハ、村壺、弟朱雀院へ、孝行ありや、忠義給り
や、べく、ものはなうさやうば傷者えきる論ハうづま給きこと
ありまてこと、ハ法麿うを、ほどのるくこえ、ばば石上ハ、源氏、
ふれ給ふ。ばけ人のうひうきくん給てふきく
あくを、又四石ふくかくひ女房をえつけてといつるも、人ぎをえつ
まてといふ間いう給べば、人新をえつくとハ、ふるも、人のうるをか
のふえつけるふてそあるを、べく、此度の法ばども、笛うくねこし。
ものえべうきて、うく　十二のひく　和名八月の紙のふて、四石より京ふうり給へ
ふて、二三の日ハ、ばば給ばがものば日ばきし、下日ハ源氏ふの四石ふて、
法ばば時をえやと給ひ、時のるし。

せをそてえかう〜　十五のひ〜　ゑまり〜きさ毋ゆ隠して、ちひてえぬさ毋う

もて形をなり。

いそけあ家形るもつう〜　円　袴を著ざれば、腰よりしたはさ毋乃、ちどけ

形くて、幼〜ゑるし。ちもつう〜とハ、腰をいつう〜ゑるハ、ごろ、腰よりしたし。

蔦をちさを

いふいしそうあど〜　二のひ〜　本ゑ毋中を、形てのあさ人とゑるを、ろてハ、近き前

ようりて後さ、人のつを形〜ハ〜いふをふ用ひうへるおもーろ。

思ひうるおく形もバ　円　ぢハどの侵し。

又みと〜ちち大臣はたぶ〜いをど〜う　四のひ〜　さ〜むひ〜るとハ、今さ〜

むひて、そひ在る小ゑるをいつるゆて、おうりはちゑとハ、そのさ〜むひ〜る

小方の、稚姓乃うは親王大臣の庶女ちりおうりて、ゑき〜ようし。さてさべ

てりをとハ、ゑるひやむ〜形き親王大臣の庶女の腹のみよりハ、世の人も思ひおう〜。

ち今さ〜むひ〜る小の方はおうりる腹のみよりハ、世の人も思ひおう〜。

父のもて形〜もさ〜むひ〜る小方はちゑどゆ、えりう〜ぬねそと

いふ〜し。ほふけ形をんはぐうにやうふいひ〜、さ流のい〜侵まるち。

形ふハ〜いふ侍をとう〜〜んはらもしるうりまべ〜をも侵まる形るを〜。

形ふり形ちハ〜いふ〜円ど〜をまて、さべ〜い〜よう〜ゆしるをとうるをや。

六　おひを見〜ゑ〜　八のひ〜　初二白ハ係氏ちゑ〜形石上〜、繁係き中ふ、ゆれと

孫姫ゑるれどといふをし、さて〜ゆを毋の私ハ二本なれど、係氏ちと形

石上〜ふうりや、つひゆを、形と見〜かの私のご〜、一つ形ふちゑびあて、を

ろくもふ姫君の御代のあひさきをこんとし。

ものがたり　九のゆ　葵巻　おとゝのひるとわるとは君とかこふ事。

ゆもしたえきゆし　十四ひ　袴きふいつることも考ふべし。こゝはやうは。

袴着は四ふ。ゆもときゆゑゆゑ。みこと。やうち。

まちうきて　十二のゆ　うハうは。ちはうは。

ゝぶよのつゆのおぶ。ふゝ　十三のゆ　父のへさ。えがものかゝ。ぶして。

よのつゆは。あるひとのむとめ。ゝば。ゆゝひとゝ。種姓はいやし。

くらもとがきまぶもてきべし。かぶうゝ。ゆるきはの女も。やむことなき

人のかゝかてわるとぶひも。おきふゝ。ぶれど。さてもみべしとゝ。

をけはゝ。上ゝ。父の入さは。えがものゝ。ゆふまぎれ

がぶ。ゝぶきとふし。次の文へつぎて。をとは。ほぶともみる。

いみしきえがおゝ。おりゝ。おきゝ。ゝ。ゆゝ。誤まり。

音入日さとゝ　十二のゆ　法白やゆ。ぶんはむ。

そのころは。ぶふとゝ　十二のゆ　そのころとは。ゝ。秋をさしていへ

ゆゝ。いゝ。ゝんゆゝぬいひざゝし。

いとづゝ。おるゆべの中　十三のゆ　ゆべは。中は。ゆ人。きゆふぶゝ。ゝ。

をのびゝをたをりゝ。ゝ　同　源氏の詞。

こゝろえぶゝ　同　源氏の。音又。をのびゝ。きはぶのゝまふ。詞の。ゝぶは

らぬを。ゆやしゝ。ゝるまぶきゝ。秋はのおゝぶせるは。をしとゝ。

細流説ゝは。をぶ。

ふきりかゝ祢 廿六のひゝ 仏ふりかえる こゝし。

ほふとゝをてゝゞれゝ 月 上ふけん寺るばりのあそびあぐゝてゝゞれ

ゝ行る。即こゝすし。 傳位。陽遁のすふいつるハいうゝき乞ゞこゝし。 塔

きふ。この字ハ衍字也ゝいつる。すてゝふさるゝこし。又この下ふ。おゆゝどれ

どいふこの為ゝるらゝいつるハ。これも陽遁のすゝんれゝる。乞ゞこゝし。

ゝゞはゝを之ゝ 月 ちややきゝゝゝゝ。すゝもゞきいゝゝれをふまぎれて洟

ん寺るばりれあそびあぐも。ほふまゝふえをゞ。ゝのさゝゞゝゝ

やれゞまんゝゝゞゝゝゝのはゝゝを乞ゝゝんゞゝ寺ゝし。これ

又云傳位造位ふべきゝゞがまゝし。位。陽遁のすふつきていつるハゝを

ゝれを遠し。上ふゝゝふはきゝる本為ゝ花ふゝ。れどゝうゝつきを

考へゝはゝるべゝ。陽遁乃すハゝふよれゝ。ゆゝうゝし。

新報堂

いよふほふふまふ 四のひゝ いよふゝ。いうふを字ゝ温ゝる。

なべゝゝ芸れゝ 六のひゝ 三の日かゝふゝ。れゝうゝれかゝし。

ふゝるゞの風 月 ゝゞ風のすし。ふ為ゝ風乾方の風ゞゝふハ皆伝説し。

みそぎ祓神ゝ 月 はきふいゝゝ。初ゝゞのゝゝぎ祓神ゝゝ。ゝ乞ハ定新

つの泳ゝり。

ふえゝをりれゝ 七のひゝ えしゝゝ。ハ新報のひよかきていゝり。位ふ為

えんゝ祓いゝゞゝしとゝうゞゞゝゝゝハゝゝ。ふゝる河ゝて考へゝ。

此抱内大ゝ。ふのふ為ゝゝゝるゝゝうゞハ必ふゝる流ゝて。れゝうゝゝ為ふ

出ぬ。けふの下句も。こゝ次の句ふう。月のうゝ。あてんねべし。

かゝれ　同　まつもおぼゝ。ちゝんやとかゝれもゝ。ゝひ行ゝし。　細

流ハ。とかんゝいふ句ゝかゝいぶ。ゝべてゝやゝの注ぶと。語のいきゝひて

ふをゝ。ねどふ。人をつゝ。ゝ。読ぶ。いゝ。ゝゝ。ゝゝのゝし。

ふつゝゝゝき。ゝゝゝへふ　八のゝ　保氏ゝの。ゝゝゝる。ゝゝのもふつきて。ゝゝ

もゝゝゝハゝゝゝゝんゝのゝゝゝゝふゝ。ゝゝの。ゝゝふ。ゝゝゝゝゝきゝゝ

ゝゝゝゝふし。ゝゝゝゝゝハゝゝれゝつゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ

ゝし。ほゝゝゝゝゝゝゝゝ

あがしちりあしかぞ　十七のひら　人のはさがれきこえハ今までもきてようゝんに
めゝをへだし。
まろうもしる　十九のひら　髪の長ういつゝぬはて、さぞかもようぜ、ぞろう
なりまろをいふ。
松ゝ行ゝ　四　松ふつりわしるまゝ行ふたもりるとそのさまに
ちりわてえもるし。松きの説あるりぞくゝし。
畑くつまがまぢ　十八ひら　俗ふぶようふ。多くまろばさんとされ
ぞいふとし。力をいまるうちしといふ位うなるぞ。
今もいみしくゝ　十日のひら　上ふ俗もなれといつハふとかぞろき話
つる時四ひ。今もといふ。ぞ一ふめもづえてかゝくゝあがと俗ちり。

ほふ。義井ちりまとつるハさぐり。
をゝゝの巻
ゑ坊ぐぢぞろゝ　二のひら　ゝそのをもぐ。ぐやうちゝびぞ。
おひつゝまぐう　ひろひら　生着し。元彼せ一ゝて。ゝおふ一ゝふてし。
巻のゝゝ移るひ未を。おひきゝいふおひりひぐ。
おろも　八のひら　ふぢぐゝに何し。下ナニのひら　ぞろ。位ぞと。ようがゝし。
かゝゝぐりめゝ　四　ゝゝとつるといふと。ふぢぐゝ。ゝ一ハ。ねふぐ一と
ゝ。官位をいつるゝて。かゝゝぐりようゝとられて。人のゝる早めゝつゝる官
位のりぐゝもゝゝびゝてやといふゝや。女の五障ゝと。おつの行ぐ行
ぐゝとつるバ。官位をも。行ぐ一といつるおや。猶ようゝ考ぬべし。

きゝさしまゞはさもなん　九のゑ　んはなどゝこゝにハ保氏ゑも・あるふも

てゝおくさゝふ儒者河をつゝひ給ふゝ笑しゝ

えんづゝうをてゝ　十二のひゝ　うゝ下ふ今一つゝゝゝみゝゝゝ蒙ゝゝ

きゝぎゝくゝて　日　此河ゝふゝ和ゝゝとゝもゝゝ也ゝ上ふゝゝもゝゝ和ゝゝ

しゝゝ蒙ゝふや

風ゝちゝかゝきゝゝしゝゝ　十九のゑ　上ふゝまゝの指ゝふゝくゝくゝのゝ

らゝゝゝひゝかきてゝさて風之力ゝゝゝ編ゝ給ひ琴ゝ感なゝ

給ゝゝくゝとのゝまへゝゝみゝゝ給ゝ河海ふゝ引ゝゝ豪士賦序ふて出る

給ゝゝきてゝくゝゝゝちゝハ内大臣のゝゝき給ゝ和琴ゝ給ゝふゝ老ゝゝちゝ給

ゝゝのゝ給給給給ゝゝゝて給給給給賦序ふゝゝゝゝゝゝゝゝ

むゝゝゝゝる本紫ハゝゝゝ給ゝゝ風ふゝゝゝゝ給ゝゝ風給ゝ力ハゝゝゝゝ

給給ゝゝゝゝ又ゝゝゝゝゝ給給ゝゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ給給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝ

ゑりはうばいぐかの不足繁衰響也といつまでのこゝろばえられる
のこゝろ。その次なる文のことばこゝろふかくうつくしきこと。
又さもこそはうゝゑ　四一のひら　夕雲雲のうちに。ゑりへばそしるはまたも
をべきこゝろおこそはうとこゝろ。但しこゝろ
対面をさせ給へと　四二のひら　給へりはなれををゝしみまるべし。
うへのみ弟　四三のひら　伊海流ゝ。
ゝびて　四七のひら　伝ゝゑんをゝがりてといふこと。
かゝづきおろして　四八のひら　おろをといふことゝいはゞゝ。
その人ゝゝぬき　四九のひら　なほまぢ紀人のゝをまるこ。実ゝあふはゝ
ぎるこゝはゝいはゞ。

みどりはうをやうか　四十二のひら　みどりは色は日ゝぎ又天女の袖ゝ。
ゝゝは色ふれるゝ。ゝをまでふり及ばざるべきゝ。六位の衣ふれ
をはゝる位をゝいはぎ。ゝふ袖もなきを。ゝまゝゝ物をふるが六位お
ゑをゝ伝のようふゝ歌ゝ詠ハ也。
いそぎゝちふ　四　えづくよ出ゝゝるいそぎをまるこ。但いゝゝき
ゑがてこゝ。いそぎといふゝかるゝ。
ゑをぶふえや足給ぬ　四　也居へまり次の位へゝけてゝいはべし。
ゑ弟へといふ位をとゞ。
ゝふゝかるハぬこゝ　四十六のひら　夕雲を六位ゝなゝ給ることゝ。
おゝるといふをバゝゝくゝえんべし。

はるみを沢うゑ　二十八のひ　田中を堀ゑるときハ、うりてなり。
はるうゑけるゆ　六十一はるの　むぐりまはし、ちぐさの花ふいるがごゝ。
ゑこかるべき　六十三のるの　濃うるべきし

むうづゝはる花

よるゝを　五月の　俗ふいふ法めゝ　ぎやうぢ四うし。よハ芝ゑるを、秋
とゆるハいうゝきむがゝし。什何、秋のゝゝんは張る人ゑる茶おぢろしおくし。
孫んさゝ　八のひ　後撰集賀ふ。年星おこなふ。如ゞんをちはもと
ちわ、ぎゞ沢ゑるとて結ひゑれゞ。ゑをへて坐ゝゑる。ゆいきんゑし　ゆくと
きふハ十年をへゝゝ山のわるゝる玉はゝ成ゑゝぎゝゑや。
今ハはさいゝひ　九のひ　今ハとハやむゝ招き人のれる招ぐゝ。かゝゝさゝゝひ

ゆゝ。今のはは月ゆゝてハといふゝゝし。　ほふ什流ふ招ぐ光てハとゝゝゝハ。招ゝゝぎ。
いゝゝゝゆゝゝゝわゝゝゝ　十はるの　ゆゝゝ清べゝ。ゝゝべゝ什ゆゝゝはゝゝゝゆを濯る
ゝゝむがゝゝし。招き糸拙ふの方はゝ。古ゝゝみゝゝゝゝゝゝゝかゝゝゝる小螺のゆ
ゝゝ濯ゝ。舌ゝゝはゝゝゆハ濯るべきふゝゝゝゝゝゝゝて高ゝ首をふぐる例ゝ。
みづゝゝを　日　下はゝ茅ゝゝゝゝゝゝゝ。
いゝゝふ　日　ゝゝゝゝゝゝ。威光ハゝゝゝゝ。
此和ゝゝ　十一のるの　ゝゝゝいゝゝゝゝゝ和ゝゝ。ゝゝる人の何。
什人乃ゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝ　十二のひ　什和の法ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
おゝゝふハゝゝゝゝゝゝゝゝ

のぶ〳〵は、云、紀、長一人ありて、婦あまたはえ、そ〳〵ばと行はんべ
りは、二人、そもふ出立んとせ〳〵を、婦はつしふえ出立ぶり〳〵ふや、
えびきのなぐ　十七のウラ　拾き考ふべし。
言うきこそふう〳〵　同　拾句、拾きふ、さるがざりるとは、拾べし。
さりざりるとはすもぞ。
いとかなるき書ふるるとされぬ　十六のウラ　とは、うち紀ふたの言ぶ、あとを
ゆどはのつぎ拾ぶ、芸長、命ふ、ふうとひるも、されば次ふ、ぶぞ
くいるは、ぶ紀ふ、ぶうきて、も、侍ふぶ書ふもとふを、芸後、命が
書ふも〳〵いるは、むがて、も、さては、ぶぞといふて、よ〳〵。
しがふまぐる　十六のウラ　ふぶうしるぶて、よるべ〳〵まぐふも。

五師　十七のウラ　三代實録、貞観九年十一月云〻、命二七大寺一講
演仁王般若云〻、與二專寺僧綱及別當三綱五師等一、相共勤
加二撿察一〻行、ぶ五師、板ふ、ふ法師と行ふ、今は古写本ふよ
まる、そ〻ふ師は、五人ある物〳〵ふ〻より、台記の別記ふ、五師五人と
もふ、又五師相憲俊勝彦實覚頼珍寛と、ふ人の名ぶあぎと
永ふ〻物ふ行り。
ヨぐふ出ふうちふて〻ふ〻　同　こは法を下上りなて、ん次べ〳〵、ふうき
出ふさうひう、ふ人ふ、ふ〻〳〵ぐふ、永出ふ物ふて〻行ま、絵ばと〳〵ふ
ま、ふ〻の絆の法びふ、物ひつまふて、それをやぐふ下へつぐふて、
つまば〳〵いつふ、文りは、ぶ拾あり。

法花市　八のひら　津場市あて。こゝに市ありて。ものハ地名あるべし。
ざりもを。後りおのづから地名ふかわて。ゆゑ有ふかるべし。也名あ
ふる。まゝ一つ。又今冊波市といふ。まゝの訛なり。ふか一つの称なるべし。
いくばくをなりまとる光　八五のひら　心也。ふか佛の頂よりハ光明を放つ
ものふかいひ。その像なりも。光明といふ和を。ふか仏り又ものなる。
そゝふ封へ。いつるあて。人のかゝもちをでゝ。いつふもぐれもわ
いへども。佛の光明のやゝふ頂よりなりまて。別ふ光。ある和ハ行ひ
といつも。　行海の説。そゝふ和ぞ。光をいつゝもぬぐり。
むりおなぐわと　八二のひら　仏人のるぼらふ。なぐわといつハ。新ゝいんなそし。
仏ゝのゝまへで　同　仏ハ光明上し。紫上ゝハおりまりいぐゝひ

ものも。湖月抄。そりぐ一つ。ゝう。落ぎふ仏ゝハ。源氏の自称ふ
ふて。ゆゝもしゝいつハ。ゆゝもし。ふふゝゝゝゝもしもゝのゝふハゝぐ
ゝぐゝおなやゝふしてのゝふつるも。ゝゝふいつふハ。ゝぐゝ
るもし。
おやをきてのゝふ　同　ふふゝゝゝゝもゝゝのゝふつるもふハふ
やふゝゝものゝもぐし。落きおなぐ。いとゝゝ。
をむゝふゝるまで　八七のひら　女ゝ嫗（オミナ）と。ふ仏のうち。女ゝいつを見ふべし。
女ふゝるゝハ。女ふおなゝふふゝるをいふ。男ふおなゝふふゝるを。をゝゝ
ゝいつゝ同ぐ。ものて中ふふ。をゝゝゝいひをんふゝゝいつを。いゝなゝ老
ゝるもかきをとゝぐる。無称ふれぐる。又意ゝるふ封へて。おゝふゝゝるを。

をうとをもをんをもいつてこゝろうこゝハをもし。ほきふ嫗（オミナ）として
いつる後。ちひごし。甲斐なきふてそう後。はゝのうへの人を。嫗とつゝやゝ
うやゝをべき。をんをゝをうおゝをゝ。又ゝをんをゝおうおゝハ。何ごとをも。
をゝごを。おゝゝゝ。老るをうにをとをうも
ゆる地あつひ　廿八のひ　をゝやゝかうゝひをゝひをゝ人を。ゝをゝ出のをうをゝ。
ふるあゝいつを。ほいゝゝ。ほうおうおうおきるをうゝ。
をゝをるをゝ　廿一のひ　をゝ。おゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ海おう。ゝ色を。をゝをゝをゝ。
をゝをの父のおゝゝおうをゝ。ゝゝふをの上をも。下をハ。ゝゝをゝ。ゝゝハま
をの父ゝをゝゝゝゝゝふゝゝおう孫をゝて。おうふハをゝん。をゝゝ
の父ゝをゝゝ孫なをの。ゝゝをおうをゝよゝゝゝゝゝをゝて。ゝゝをゝゝ

ゝをゝをゝ。ゝの何をゝ。ふゝゝゝゝゝをゝをゝをゝ。
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　廿二のひ　ゝゝをゝきゝゝゝゝゝゝゝゝ。
をゝをゝをゝひゝを　廿三のひ　限らゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
をゝゝゝ。おゝをゝゝゝゝゝ　廿六のひ　ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まぶりを源氏ゐのくをまどゐせ〜といふは、ゑごとし。そは結ひ〜〜
いふ組もかるべく、又まどひ〜飛のむろひ〜いふも、おなじり。又下文に、
元歌の組ふかく、ゑをこゑをうし〜といつてふつきて、こゝは宮姫の源氏ゐ
のくゆまどつさ〜そ〜むろひ〜もろるべきやうかとゞも、そは仏ふかく
こゝろうし〜いつふうかゝるし。
もてもづそんうし　十八のひ　うるさかそりはうるつかりし、夕雾中ゐもうは
べだりてそ、さくようふうるつかゝ、そふはゐのうをうるうし〜云さ
うり。但ゑゞこし、うゞ〜だうをうゞ〜ゐ結ひ。
こてふのゆゑ
ゐふちふ月をうし　七のひ　沙二白はうをは、閑あ月ゆるぎつべきわどの

花ゐうさもいつ〜ざるゐ、ひをうをうし。但ゆうゐ形ゞ。
ゐあてふふとうし　九のひ　沙白、赤てふのをとをもうきをうり。
源きはんもちひやうし　十はひ　しゆゞ一をびをゞめて対面〜結ゐのく
ゐゑゞは、源きはんもちひのゐゞは、儀うんゐいゞ行うん、そをは志ろがく
ゐまゞ、ゆゞ、ゐまき〜をうを行りうし。但ゞも、行りうをぬをし。
よゐをとひのうし　十七のひ　新ゐうぬ人を新〜も行ゐ、茶、後の訳と
いひうゐ〜いせるをゐ、よゐをとをひのをといふし。
ゐ〜ゐちゞれのうし　十のひ　沙二白ゐんはぬゐし。ゐのゐ月は、橋の源の月し。
ふゐ〜ゐ松のく　十四のひ　門ゐをふゐ松ゐゞ、和ふゐべ〜。
をてををゐとゐふ　十六のひ　をゐをゐをこゞをとゐふ、をゐをゐをうつ〜伝

まるもはなり。うるるはるる。上ナおのゑ〳〵ふるてゝうり。考ゑ〳〵しび侍。年
のまゝ。そハむ。ぎふ。ゆゝぬゝゝ。一年ふび侍るきハ。ゆゝぬる。ゆる。れ
ふ。のぞきゝるゆるべし。

螢光

ゝゆゝ。ゆゝ。させ。ゆる　二のひ　させの二字。のぞゝべし。
ちふゝゝ。ゆふゝゝハ。ゆゝ。ゆ。　四のひ　ゑゑ。ふ。ゆる。ゑふ。ふ。ゆをゝきゝ。ゑ
ひてゝゝハ。ゆゝ。ゆ。ゆきゝ。

夕やゝきゝぎて　日　下ふ五日のゝ。ゆゝ。ゆ。ハ。ゝハ。三日ゝ。ゆゝ。ゆ。ゆゝ。べきふ。ゑ
やゝいゝ。ゑ。ゆ。ゆを。ゆる。ふや。
ゝゝ。ゑ。ゆゝ。ゆ。　五のひ　ゑ。ゆゝ。ゑゆのふ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆ。ゆゝ。ゆ。ゆゝ。ゆ

ふきまうて。俗ふ。そでふりぶうきうまてうまくいまくも。されど位
高貴あらん〜主什分ふ要らぬんぞ〜ようも。

そこちかの花

又あるづくりかくぬ方ぬても　ロのひく〜今まで。源氏あれるくてまし
うべ。うるづくりかくぬ方ぬれど。そうふつけても。ものさとんくも。
ちくべるかしやちぐけかしや　八のひく〜一本ふハ。ちくべもくかしちぐけか
しやとうわ。それもこれも。上下の俗ようかなうで。俗えべ〜今うく
うくふいうで。ことづくきちくべもかく。ちぐけかきかうく。什酒よか
どあるべきそうも。

おやさうつか　十のひく〜什酒催るふあてハ。親のつさえさうつよか

を。今源氏えのうくひまふうをハ。親をいうひさうる書。そハ親を
みづくうふあて。むづくかうと。書ふかうて〜も。今をうけかふを九
書ふハうて〜うわ。源氏えかきうを。ゐ者えのいうひまふくうを。
ひて。什酒のをうく〜あづて。うくひまも。上うるうふかやふをむう
うぞ〜ぬづひうきく〜うるまもうふべ〜。
人よちんうちぬうぞかうを　日　ひハ。かうべ〜。
んのうちふうひまうく　日　そのむくべきまかむうぞ〜。ぞんの角うう
ひづきて。まぎくうくおくも。
人ものを名　日　をを名んくうくと。うふけうを俗ようふうもうること
くかべ〜。ちうかけ学の人よつきていんうハ。を名とつべきふうくぞ。

かろ〳〵しさを　十二のひら　さハぎ　なるべし。

みこもそもろ〳〵　十四のひら　あそハぞ　なるべし。

ふぐりはぐゝふくゝ　十七のひら　これを　ぎはとらひふ人の　かたちもて

ちゝはわかゝゆらぐ　不詳のぐゝふくゝ　ちゝ　イン下

つるゝもいひゝつゝ　ほふ　寒ふけるぐゝとまるやに　つへひぐゝ心

かゝへそかぐやつき　十九のひら　ゆゝしのりゝそ　俗ふ　むゝつハそれでゝ云　さし

伺ゝつ　寒さゝふ　十四のひら　さハぎの　俗りなるべし。

ゝぐゝの　俗ゝはむゝひすゝ　十二のひら　そのつゝゝハかの　多寡　大俗乃

奉ふ　ゝりゝちゝるゝをつるゝて　むゝひゝハそふ　あやゝるゝ

ゝつふゝ　そゝぐ　飛ゝつひ　むゝひゝ　ゝつふ　俗　素法ふ　瘖瘂ハ　此語

をゝゝるゝ　むゝひゝ　俗りて　ゝるゝ　ゝる　何ゝて　実ハ　その

大俗ふ　ゝりゝ　ゝつふ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

のゝゝ　ハ　俗ゝ　ゝつひ　むゝひゝ　ゝの　ゝゝ　ゝの　俗　ふの　ゝゝ　ゝの

ゝし　ほふ　近ゝ　ゝ　舌ゝ　ハ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

むゝ　ゝゝ　ゝ　上文を　ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

上ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝき　歌の　十三のひら　ゝゝき　ハ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝいふゝし。

いゝふゝ　十四のひら　かゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ふゝ乃ゝゝ　ふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

永ながしとかし。

今年はかくこそ　日　夢陸のいで湯の海、陸きふりて。

大門の松　日　陸きふりるうハ、かるみつて。

やぐてかき陸へ　十六のり　やぐてハ、俗ふるさぐかくいつもそし、けみと

中納言ふるさくして、えせし、さぐふるてりをさ陸へくのうあもし。

湖月本ハ、ぐをぐふ陸きり。

かくて史記

なるかぐりはうごとあても　二のり　なるかぐりはいくうはかと、まても

はりかくして仕信ち、かくへ人はえせうくとゆへうるて、こまりかくん

女房、さバうかふ拙きうくさて、なるかぐりはくと、まても、かくへふえを

いひつくて陸くくそと、汝分せうとし、信ちぐと、まてもくいつるふ

くるるど。

ぶうくくくそ　日　どりぐ衍うるべし。

うち松　三のり　陸きふ、定ふて、はうはうをりて、折松を信とうれくいつる。

知うべし。折松を、ぐくれ、定ふて、うハ、はまるそふ、みを乗く

いふ乗てそいくぐふをうれくて、ぐくうとれを、ちうぐ、ふをき。

くくや　四のり　け組、来陸花、ちふ、ふ、こてくはぐくふ。

ふぐれなくくとてそ　六のり　くれを人くの、ぐべきうくべのくふくぐ行ものくハ

うくて、ふぐべきうくれる、えふぐくくるてを、て、下のくるハ、むぐくれをの

安父のうすれど、ひひ知くうもやのくうるべし。

ぶつかれとゆるす　日　攻甲斐の和琴をあつとしなすもしぶとい上
ふとものうらふものうらうらといてるけうきうり
聖分光
かぐざくら　四のひら　和名抄ハ朱櫻・迹波佐久良（ニハザクラ）と云ハ加字は義
るふてかふだばくらし　かぐざくらといふもけふもどをくぶきうる
ありけり　はきふいつるこゝとも考ふべし
うまへがかる　九のひら　はきを考ねべし　高はかもきばるびて　美紫の
日ふもうしそうれへいふやうかるばいつり　紅の紅を高をかるをばし
をわふかうしぬまへどもかるもて　十七のひら　こゝハ上の紫上のうを橋のう
へをもと合をていつるし　他本ども　ふふうへどもとうるふ　朔日本ども

の二ものきいふろし
うちうをうぶふや　十八のひら　山田紅をといふふうかし　ふふ　うち
つをうぶを家〳〵侵るかるべし　せふは翌紅ふをうふをくかるる
ふおぶつきて　うちはをまふ衣服のまうをいそぐし
ぬづくけくべのほうのむよ　十九のひら　山伯　人紅ぐ〳〵　よもぎも紅うべ
聖分光
まうをうかるはかるかる　二のひら　源氏ふの玉鬘ふ　ひうをんふ西大
はを　美紫　源氏　源氏ふ　をやふ　聲ふ　はやふもてかし
紅ぐをこゞ〳〵　かうんうし
ふを〳〵　ふ山ふ　六のひら　大原望月　美ハ今日ぐめをいふ住ふ　ふふ和

えど院より延長六年より修わるを引て、みゆきたまはるとハあるし。
物ふ世俗の行幸にハ延長のふかてゝ見るハ、むかしし。
よるぎき〜 七の日〜 俗ふ、ぬいさうはといまとて、けゐいでたまるを、
みるまゝとし。 住ゝはしもがて。
ゆうゝ結ふべき住ゝはしなも 日 とハ。の張を見し。
うぐいすもる 八の日〜 うぐいハ氏し、ゝもの中かわらば。
よるぎき〜 九の日〜 今ハ出切りしいさうはるまふうはりとし。
ふひきふゆ〜 十の日〜 今ハいとしもがひきるすはとバそれう
ゆうてし上ふ立をめ〜名のうるとうまるはあるうけうとうるれふ
ひうきし。 住ふをゝはきはのうすはとべといるハ、むがゝし。

まちうわう〜 日 一ゝび立ゆる名を、住まわがうゝといまを、ふうう
ているゆて、まちうわゝいひ、ゆゝ、いまを、住とうるあかつきい
ゆる泊し。 住いうゝき紅ゝてし。
ふうゝはがふべきもう〜 十二の日〜 ちゝふかゝきかうゝ成ゝうゝひあを、うるき
ゝの人ゝうゝでも、はるゝうけもゝどゝ、ゝも紅ふうるゝ人うき時りハ、
まづうきゝ成ゝ人をうわ結ゝんゝし。
けうゝうゝ 十三の日〜 世俗ゝを結りてゝいふゝ、ゆゝうゝ、ゝハ
原氏ふへはるゝ〜ゆて、ゝのうゝをゝて、けうゝうゝはるふはりてぬ
乳ゝやゝをかてもけうゝんゝ。 細流の流れゝ。
おのづゝうゝるゝ〜ゝもはきふ 十六の日〜 ゝ立ハうゝるゝはきふおのづゝうゝ。

下ふうちくして、下の十餘人はたゞひめへとべくいふへうけてんはべ
〳〵おなじくといふへきつぐなり。

義を加方はさま

寧和史物日じ色はきゝ　三のゝ　四大はのれ方は大きのかうまあひ

〳〵八三月有ゆゆ〳〵て義来聚きふて、ちるゝて夕雪ゑハゝ
光中ゝ母方は祖母ふおゝゝ繼ぐ服ゝ三箇月ゆて六月ふゆぎゆふ
べきふ今八月まで、ゆゆ殺ゆるゝいなぐ、もゝくハ夕雪ゑゆゆ、ゆわ
ゆて恩係き祖母ゝおゆゆ〳〵バ父方ふたゝ〳〵へゝ。ゆ箇月ゆ
〳〵ゆて来、ゆゆ〳〵ゆ父ゆふ〳〵ゆ〳〵いふべきこゝゆふ伝ゝもいゝなぐるハ
いゝゝ〳〵。伯母ゆれぐ、ゆゆちづ〳〵は係ゆやゆ〳〵ゆ。

ゆ〳〵ゆ　ゆのゝ　服の色ゆて、親ゆるハ祖父母はぐつふゝの、ゆるゆ
ゆ係ふ、ゆふもつるゝゝ。又ゝ代ゆ、むづ〳〵は系の、大きの彼をき係へ
ゆゝ。四大はの中〳〵つふゝ〳〵代ゆ引〳〵ゆ母はぶかくいるゆや。
ゝゝゆゆ　ゆのゝ　祖母ハ、ゆ男は本を係ぬるふゝ。二三の母ハ、
ゆゆ〳〵実ゝ四大はの子ゆて、係氏系は中ふふ〳〵ゆハゝいふゝ。
ゆるハゝづ〳〵ゝ。ゆゝゝゆゆ〳〵係ゝ母ゝ。此ゆ慈めて中ゝ
ゝゝるやゝふおゆめきて、ゆ〳〵バゝよめゝ。ゆゝゝひゝ。ゆ母ハ、ゆれゝし
係氏系のれふゆ〳〵ゆゝ。夕雪ゑ系ゝ。兄弟のゆゝゝゆふゆゝゝ
係きやゝふの〳〵ゆふゝ服を日じくきゝふゆて係かゝちゆゆ
ゆ〳〵ゆゝゝゝゝゝ。夕雪ゑ係ゝのかゆゝハゆ〳〵ゆかりゆゝゝ係ゝ。

ゑ八かうちゝる方ふ。月ひゝへる袍に。うゑと紫とハ。こゝ花稜ゝ花乃
色ふつきて。いつるだりゆゑ。うゑをふとハ。ゝゝゆゑ。ゆゑといふこ
ゝふ。紫ゑいつるのゑ。かゝてゝ夕寄ゑ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。こゝ
ゑ表ゝ。ゝゝゑ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ

たまどもゝいつゝし。 ほうさ花。ゑむげこし。
あいもせ山ゝ 十三のひ〳〵 まづゝえの梅あやいと。
はゝ仮ゝえぞゝ 十六のひ〳〵 ほうさよろし。銀の泊みあるゝし。
ゝんもてゝゝ 十七のひ〳〵 ゆうひさ。ひがんゝゝ。日新ゝゝむゝ人ぎを。ゝれど
かゝゝをおのゝ上〳〵ハきゝゝぐ。日新てきゆるハせんゝゝ。おし。さゝゝ
ゝるゝゝハきゝて。ゝハんゝゝ。ゝ。ゝゝ。ゝゝ出るゝゝゝゝゝゝれど。
いゝぐゝゝゝの花ゝゝ。ゝひゝゝぐゝゝん。ゝれどんゝゝまをゆゝどハ。
おゝゝゝゝ。